

「支えるスポーツ」からみる持続可能なスポーツイベント —金沢マラソン2019の応援スポット運営関係者への調査から—

Sustainable Sport Event from the Viewpoint of “Supporting Sports”
—A Survey of People Involved in the Management of cheering spots for the Kanazawa Marathon 2019—

西 村 貴 之 (人間科学部スポーツ学科准教授)

Takayuki NISHIMURA (Faculty of Human Sciences, Department of Sport Science, Associate Professor)

池 田 幸 應 (人間科学部スポーツ学科教授)

Yukio IKEDA (Faculty of Human Sciences, Department of Sport Science, Professor)

〈要旨〉

スポーツツーリズムの推進による地域活性化を企図したシティマラソンが各地で開催されている。スポーツイベントによる地域活性化においては、ボランティアにイベント運営を支え、その地で日々暮らしている地域住民の存在が不可欠である。そこには単なる運営コストの削減ではなく、イベントの魅力化やイベント実施による地域内波及効果創出への期待がある。

本稿では、「金沢マラソン」を事例とし、沿道応援スポット運営関係者に対する調査結果から、「支えるスポーツ」からみた地域活性化や持続可能なスポーツイベントの運営について考察を行った。その結果、全15カ所に設置される応援スポット間での格差の実態が明らかとなり、運営への継続的な地元の協力を得るためには、1) 応援スポット運営における負担感の軽減、2) 応援スポット運営における充実感の創出、の両者のバランスをどのようにマネジメントしていくかがポイントとなることが示唆された。

〈キーワード〉

スポーツツーリズム、シティマラソン、スポーツまちづくり、ボランティア、協働

1 背景

1-1 スポーツツーリズムの推進

観光庁(2011)が示した「スポーツツーリズム推進基本方針」では、スポーツツーリズムはスポーツを「観る」、「する」ための旅行そのものや周辺地域観光に加え、スポーツを「支える」人々との交流など様々な要素を包含した、複合的な旅行スタイルの創造をめざすものと説明されている。また、スポーツを通じて新しい旅行の魅力を創り出すことで、日本の保有する多種多様な地域の観光資源を顕在化させ、“スポーツをテーマにした観光魅力化による感動の実現”を達成し、訪日外国人旅行者の増加及び国内観光旅行の活性化を図るとしている。また、スポーツ庁(2017)が示した「第2期スポーツ基本計画」ではスポーツによる地域活性化の数値目標として、2017年度から2021年度までの5ヵ年で、スポーツ目的の訪日外国人数を250万人に、スポーツツーリズム関連消費額を3,800億円にま

で増加させることが掲げられている。その具現化に向けた取組みとして、大規模かつ国際的なメガ・スポーツイベントをはじめ、地方都市でのシティマラソン大会の開催、自然資源を活かしたアウトドアアクティビティの開発、国内外からのスポーツキャンプや合宿の誘致などの取組みが国内各地で展開されている。

1-2 問題意識

スポーツツーリズムの推進において、スポーツを「する」あるいは「観る」ことで国内各地域の交流人口を拡大するためには、当該地域においてスポーツを「支える」人材の充実が求められる。特に本稿で着眼するのは、スポーツツーリズムの推進を高度専門的にマネジメントする人材ではなく、地域活性化を目指して開催されるスポーツイベント等において、ボランティアにその運営を支え、その地で日々暮らしている地域住民である。スポーツイベントに

よる地域活性化を成立させるために、その存在を欠くことはできない。それは単なるイベント運営コストの削減ではなく、イベントの魅力化やイベント実施による地域内波及効果の創出への期待を含んでいる。「する人」、「観る人」を獲得するだけでなく、「支える人」たる地元住民から歓迎され、地域に欠かすことのできないスポーツイベントを創造していくことが、持続可能なスポーツツーリズム推進におけるキーポイントの一つではないだろうか、というのが本稿の問題意識である。

以下では、「金沢マラソン」を事例とし、「支えるスポーツ」からみた持続可能なスポーツイベントについて述べていきたい。

1-3 金沢マラソンの概要

金沢マラソンは石川県金沢市内をコースにフルマラソン種目を実施する都市型マラソン大会である。2015年に第1回大会が行われ、2019年10月27日には第5回大会が開催された。“金沢をまるごと走る!”をキャッチフレーズに「金沢の魅力」を国内外へ発信、「交流人口の拡大」、「地元経済の活性化」、「市民の健康増進」の4つが開催目的となっている（金沢マラソン2019, online）。

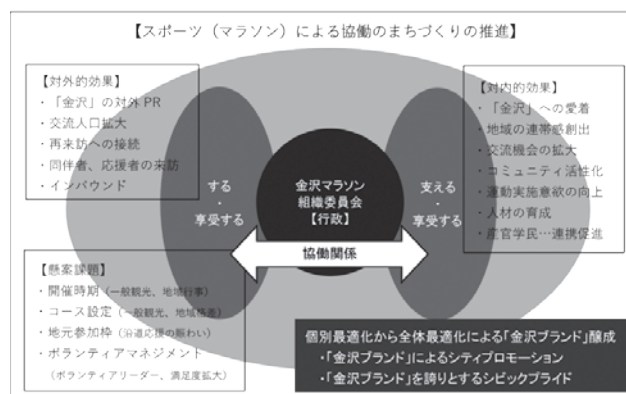
大会組織委員会によれば金沢マラソン2019にエントリー（当選し参加料を入金）したランナー数15,623人、申込者数34,411人、抽選倍率3.1倍とランナー数、抽選倍率ともに過去最高となっており、堅調な大会人気がかがわれる。このような大会人気の一因に、沿道からの手厚い応援がある。ランニングポータルサイト「RUNNET」に掲載されている金沢マラソン2019の大会レポートにおいても、「途切れることのない沿道応援」への高い満足度を表すコメントが多く投稿されている。同大会を支えたボランティアスタッフ数は5,039人、沿道応援者数は22万人と報告されている。

金沢マラソンのランナー満足度を高めている手厚い沿道からの応援は、大会創設段階から意図的に設計されたものであった。コース30キロ過ぎ地点とフィニッシュ地点の2ヵ所に設けられた「応援ステージ」やコース中19ヵ所に設置された「応援スポット」では和太鼓、ダンスなど多彩な演目が繰り広げられ、通過するランナーを応援し続けている。さらに「沿道にぎやかし隊」として登録された団体が各所で声援を送り、ハイタッチでランナーと交流する。これらの仕組みは大会組織委員会の事務局を担う金沢市行政の主導によって構築されてきた。

1-4 これまでの知見

筆者らは、2015年の第1回大会より「支えるスポーツ」の視点から、金沢マラソンに関する調査研究を継続的に行

図1 めざすべき金沢マラソンの運営モデル（将来）



出所）西村・池田(2020)

ってきている⁽¹⁾。

このような、一連の調査研究の中から、めざすべき金沢マラソンの運営モデルを示したのが図1である。

図1のようなパートナーシップ型の運営モデルを構築することで、「する人（ランナー）」にとっても、「支える人（沿道応援者、スポット運営関係者、ボランティアなど）」にとっても、互いにメリットを共創し、関わる全ての人々にとってプラスの価値を生み出す「協働のまちづくりのシンボル」としての金沢マラソンが可能となる。これにより、地元住民にとって金沢マラソンは「わがまち」を代表する象徴的なスポーツイベントとなり、「金沢ブランド」の醸成につながっていく。「金沢ブランド」の醸成は金沢という都市を世界へと発信するシティプロモーションを促進し、「金沢ブランド」を誇りとする市民の「シビックプライド」形成に寄与する。

金沢マラソン組織委員会は今後めざすべき大会像として、「参加ランナーに選ばれる大会」、「多くの関係者で支える大会」、「県民・市民に愛される大会」というビジョンを打ち出し、ボランティアや沿道応援者の満足度を高めていくことをこれまで以上に重視しており、その大会動向、そして関係者の変容過程について注視し、知見を蓄積していく必要がある。

2 金沢マラソン2019の応援スポット調査

2-1 応援スポット

前述のとおり、金沢マラソンの参加ランナーの満足度を高めている要因として、途切れることのない沿道応援があげられる。中でもコース中19ヵ所に設置された応援スポットは大会の賑わい創出において大きな役割を果たしている。金沢マラソン2019（概要を表1に示す）において設置された全19ヵ所の応援スポットのうち15の応援スポットは「金沢方式」と呼ばれる地域自治システムと連動している。金沢マラソン組織委員会事務局を担う金沢市行政からの依頼により、町会連合会、公民館、婦人会の3つの団体から

なる「金沢マラソン応援スポット実行委員会」がスポットごとに組織され、運営を担っている。金沢市内の全62の町会連合会は、15カ所の応援スポットのいずれかに振り分けられる。各応援スポット実行委員会の統括を担当する町会連合会は輪番制を原則としている。

表1 金沢マラソン2019の概要

大会名称	金沢マラソン2019
主催	金沢マラソン組織委員会 (事務局：金沢市文化スポーツ局 金沢マラソン推進課内)
開催日	2019年10月27日(日)
種目	フルマラソン
参加料	10,000円
申込者数	34,411人(抽選倍率3.1倍)
出走者数	14,261人(エントリー者数15,623人) 【県内】6,202人【県外】8,196人 【海外】1,252人
完走者数	13,756人(完走率96.5%)
ボランティア数	5,039人
沿道応援者数	220,000人
事業費	4億2,000万円
経済効果	22.6億円

出所) 大会組織委員会事務局提供資料をもとに筆者作成

2-2 調査目的

金沢マラソン2019の応援スポット運営関係者を対象とし、その実態を把握することで、参加ランナーだけでなく、ボランティア、沿道応援者がより自発的に金沢マラソンに取り組むことができるような、改善方策立案に向けた基礎情報を収集し、「支えるスポーツ」の視点からみた持続可能なスポーツイベント運営についての知見を得ることを調査の目的とした。

2-3 調査方法

金沢マラソン2019に設置された全19カ所の応援スポットの中から、①コース序盤、中盤、終盤というスポットの配置場所、②スポット開設時間の長さに連動した運営関係者の拘束時間の長短、③スポット運営での複数町会連合会連携の有無、という3つの観点から、大会組織委員会事務局との事前協議により、5カ所をピックアップした。ピックアップした5カ所の「応援スポット実行委員長」に対して、大会組織委員会事務局から調査への事前協力依頼を行い、了承を得た上で、筆者及び共同研究者による聞き取り調査を実施した。聞き取りの際、対象者はこちらで指定をせず、「応援スポットの運営について詳しい方」という形で依頼した。応援スポットの実行委員長が単独で聞き取りに対応したケースが1カ所であり、それ以外の4カ所では

実行委員会事務局を担う公民館館長や事務局職員の同席があった。また、複数町会連合会での連携による運営がなされている応援スポットの調査では、連携した各町会連合会長や公民館長も同席した。

聞き取りは、①応援スポット運営における良い点、改善すべき点について、②地元地域の盛り上がり、地域活性化効果、協力体制について、③大会組織委員会事務局(行政)との関係性について、④大会運営における工夫について、という発問を軸に、半構造化法で行った。調査日は2019年12月23日(月)、26日(木)、27日(金)、29日(日)の4日間で聞き取りに要した時間は各スポット30～90分間程度だった。調査の趣旨を十分に説明し、同席者の了解を得た上で、聞き取り内容をICレコーダーに録音した。録音データは全文を文字起こしし、テキストデータ化した。

また、聞き取りと合わせて、各応援スポット実行委員会が大会組織委員会に提出している「応援スポット実施報告書」や、スポット独自に作成している運営マニュアル、各種会議資料などの関連資料を収集した。

各応援スポット運営関係者への聞き取りおよび、応援スポット実施報告書などの収集資料によって得られたデータを整理した結果が表2のとおりである。

2-4 調査結果

(1) 結果の全体像

調査の結果(表2)から、応援スポット間での格差が存在していることが明らかとなった。

今回調査の対象とした5つの応援スポットでは、具体的な以下のような格差が存在していた。

- ①1つの応援スポット運営に連携して参加する町会連合会・公民館数は最少で2つ、最大で9つだった。
- ②大会当日の応援時間(先頭ランナーの通過から最終ランナーの通過まで)は最短で47分、最長で4時間20分だった。
- ③大会当日の拘束時間(集合、準備から撤収、解散まで)は最短で1時間45分、最長で7時間だった。
- ④応援スポット出演団体(吹奏楽、太鼓、踊り等)数及び出演者数は最少で1団体(25名)、最大で10団体(270名)だった。
- ⑤各出演団体が演目を披露する回数は最少で1回、最大で2回程度だった。
- ⑥出演団体への謝礼金は「あり」が4スポット、「なし(弁当と飲物のみ)」が1スポットだった。
- ⑦出演団体以外の沿道観客数は最少で100人、最大で1,500人だった(応援スポットAは回答なし)。
- ⑧応援スポットの当日運営スタッフの人数は最少で5人、最大で50人だった。

表2 応援スポット関係者への聞き取り調査結果

	応援スポットA	応援スポットB	応援スポットC	応援スポットD	応援スポットE
参加町連・公民館数 ※ 婦人会は一部不参加	2	9	9	2	3
応援時間 (先頭/最終/詰間)	8:55/9:42/0:47	□ 9:27/11:16/1:49 ■ 9:16/11:36/2:20	9:45/12:15/2:30	10:37/14:37/4:00	10:40/15:00/4:20
拘束時間 (集合/解散/詰間)	8:15/10:00/1:45	8:00/12:00/4:00	8:30/12:25/3:55	8:15/15:15/7:00	9:00/16:00/7:00
出演団体数	1団体	□ 6団体、■ 5団体	6団体	10団体	7団体
出演団体参加人数	25人	□ 100、■ 123人	86人	270人	128人
出演団体の演目	吹奏楽1	□ 太鼓5、歌1 ■ 太鼓2、踊り2、吹奏楽1	太鼓3、吹奏楽1、 梯子のぼり1、児童合唱1	太鼓1、コーラス1、吹奏楽1、楽器2、 踊り3、パトン2	太鼓3、踊り2、中学生声援2
出演団体出演回数	応援時間中継続 ※応援終了後アンコール演奏あり	2回程度 (15分毎)	1回(各30分)	2回 ※出演時間は団体毎に異なる	1回(各40分) ※1団体のみ20分
出演団体への謝礼金	あり(④40,000円)	あり(④10,000円)	あり(④5,000円)	なし	あり(④15,000円)
出演団体への飲食物提供	なし	なし	なし	あり(弁当・飲み物)	なし
観客数	—	180人	1,500人	600人	100人
当日運営スタッフ人数	5人	50人	40人	35人	46人
運営スタッフへの謝金	なし	なし	なし	なし	なし
運営スタッフへの飲食物提供	なし	あり(コーヒー、お茶) ※弁当/昼食は各公民館で判断	なし ※一部でコーヒー、アメを提供	あり(弁当・飲み物)	あり(弁当・味噌汁)
実行委員会の開催回数	なし	1回(かつては2回)	2回	2回	2回
実行委員会の開催時期	—	8月下旬	7月中旬/10月中旬	9月上旬/12月上旬	7月上旬/9月中旬
実行委員会予算規模 (収入科目内訳)	60,000円程度 (市委託金/地元負担金)	240,000円 (市委託金のみ)	146,320円 (市委託料/前年繰越)	300,000円 (市委託料/連合町会助成金)	180,000円+α (市委託料/町会持出し)
町連による経費の自己負担	あり(④10,000円)	※弁当/昼食代は公民館予算から拠出 なし	※市委託金を各校下地区に配分 なし	あり(④60,000円)	あり(+α持出し分)
輪番制による 実行委員会運営状況	—	□は●●公民館が固定で担当 ■は4公民館での輪番制(第5回大会 から2巡目)	3校下(公民館)がメインとなる 輪番制	2公民館での輪番制 ※当初は3公民館だったが別スポットへ分 化	3公民館での輪番制 (現在2巡目)
スポーツ運営課題	出演団体以外に応援スポットに集 まってくれる人を増やす	学校機関との連携	条件の異なる多くの校下が名を連ねる ため、意見の一致が難しい。実質的に は2つのスポットが存在。	応援スポットが校下内にある/なし による地域間の温度差がある。	拘束時間の長さによる肉体的、精 神的負担感が強い。

※応援スポットBでは担当範囲内に□と■の2カ所のスポットが配置されている
出所) 各応援スポット運営関係者への聞き取りおよび応援スポット実施報告書をもとに筆者作成

- ⑨運営スタッフへの謝金が支払われている応援スポットは0であった。
- ⑩応援スタッフへの飲食物の支給については、「あり」が3スポット、「なし」が2スポットだった。
- ⑪当該年度における各応援スポット実行委員会の開催数は最少で0回、最多で2回だった。
- ⑫各応援スポット実行委員会の予算規模は最少で60,000円程度、最大で300,000円だった。
- ⑬各応援スポット実行委員会の運営予算に対して、町会連合会や公民館予算による経費の自己負担は「あり」が3スポット、「なし」が2スポットだった。

(2) 自由意見

聞き取り調査で得られた自由意見について、主要なものを以下にあげる。

【応援スポットA】

- ・第1回大会の時は3地区で実施していたが、2回目からは2地区での実施となり、地元商店街と連携するようになった。外れた1地区は現在別の場所に応援スポットを設置している。
- ・スポット設置位置が（商業施設の：筆者追記）屋根の下にあり余裕がある。
- ・拘束時間が短いことが負担の軽さになっている。
- ・金沢マラソンがきっかけとなり、町会連合会と商店街との交流が生まれており、新年会や互礼会への相互参加が生まれている。
- ・出演団体以外の地元関係者へ応援への参加要請をしていくことが課題となっている。

【応援スポットB】

- ・ランニングサイトでの大会評価が高い理由に沿道応援がある。公民館や回覧板などでも情報をまわしたらいいのではないかな。
- ・（ランナーの：筆者追記）ネームカードに書かれた名前をマイクで呼ぶようにしている。
- ・視覚障害のランナーは追加費用なしでも、希望すればゼッケンにネームを記載してあげれば、応援されることが伝わるのではないかな。
- ・（金沢マラソンとは別の：筆者追記）リレーマラソン大会へ参加するチームがある場合に公民館から補助金を出している。
- ・実行委員会の9公民館のうちコース内は2つのみ。自分の校下から抽選か何かで2、3名必ず走れるような体制になれば・・・
- ・自分達も楽しもうということで、コスチュームを自分達で考えてもらってハロウィンの仮装をした。

【応援スポットC】

- ・応援スポットの設置場所と校下所在地とのズレ、ギャ

ップによる問題が生じている。例えば、1校下1スポットにするのも1つ。

- ・応援スポットを過去に2ヵ所に分割した。当初は市委託金を2分割していたが、2018年から委託金の金額を上げてもらっている。
- ・コース外の校下から沿道応援者を出す際、大事なのは応援する場所の近くにトイレがあること。
- ・変わらず協力的なのは民間の駐車場。どこへ行っても気持ちよく「どうぞお使いください」という感じで言ってくれます。
- ・自分の担当場所以外は全く知らない。ここはこうしているということがあれば。うちもそれをしようとなるかもしれない。

【応援スポットD】

- ・当初は3公民館でやっていたが、現在は2公民館になった。●●公民館は新たなスポットを設置した。
- ・●●（公共施設名：筆者追記）駐車場を使用できることは、資材運び、出演者の着替え等に利便性がある。選手にトイレは用意されるが、スポットは十分でない。コンビニトイレも行きにくい。
- ・県外ランナーは商業的にはいいが、地元ランナーを応援する、地元から参加できる環境も必要ではないかな。
- ・地域の中学生、小学生、児童館にも応援をしてもらう。地域や学校をあげてやっている。働き方改革や先生方の負担もあるが、みんなで一緒に応援する。
- ・各スポットの実情に応じた市委託金の見直し、必要経費の算出が必要では。連合町会からもボランティアとはいえ、飲み物くらい出そうと予算をつけている。
- ・ジュースやコーヒーやお菓子など、応援している人に、4時間、退屈をしないようにおもてなしするのもこのスポットの特徴。
- ・各地域が同スポット運営しているのか。意見交換会ではないですが、そういうことも聞ければ参考になるかもしれない。

【応援スポットE】

- ・コース変更し、我々の地域の拘束時間を短くする。
- ・運営費用をかなり節約したが、若干足が出る。
- ・楽器運搬コストの問題などがあり、中学校吹奏楽部は生徒達が、スティックバルーンなど小道具を使って応援する形に変わった。
- ・一番謝礼をもらわなければならないのは、公民館、町会連合会、婦人会などのお世話役です。頼んだ団体にはわずか30分来て●●円を出して、ありがとうだから。
- ・10分、20分くらい、近所で走っているから見に行っても応援する。さあ、帰ろうか。それなら楽しそう。今

は、そういうものではない。半強制でやっているわけだから、そこに継続性を含めた運営方法があってもいいではないですか。

- ・それがダメなのだから、応援のスタイルを検討してください。拘束時間を少し短くしてくださいと。そういうことを含めた声が出てくる。それを含めて、色々な面で協議していただいて、皆の負担感の緩和につながることをやっていくのがいい。

3 考察

3-1 応援スポット運営における負担感の構成要素

調査結果をふまえると、応援スポット運営関係者の負担感を構成する要素として、①準備から撤収までにかかる拘束時間の長さ、②地元町会連合会や公民館の独自予算からの持ち出しによる応援スポット運営費用の拠出、③コースが地元地域内を通らない、あるいは、応援スポット設置地点が毎年固定的にコース終盤にあたるというコース設定、④雨天が多く応援スポット運営に支障をきたしやすい天候および開催時期、の4点があげられた。傾向として、コース序盤に位置する応援スポット関係者に比べて、コース終盤に位置する応援スポット運営者の方がより強い負担感を感じていると推察される。

3-2 応援スポット運営における満足感の構成要素

応援スポット運営関係者の満足感を構成する要素としては、①準備から撤収までにかかる拘束時間の短さ、②地元地域からの出走ランナーに対する応援実施による盛り上がり、③コースが地元地域内を通る、あるいは、応援スポット設置地点が毎年固定的にコース序盤にあたるというコースレイアウトの3点が挙げられた。また、満足感が高いと感じられる応援スポットの運営中核メンバーからは「せっかくの機会なので楽しんでやろう」、「この機会を活用しよう」という発想があり、高いリーダーシップやホスピタリティを発揮し、関係者の負担感を軽減すると同時に満足感を高めている様子が見受けられた。

3-3 持続可能な大会運営に向けての検討課題

今後の持続可能な大会運営に向け、応援スポット間に存在している格差や不公平感を是正し、継続的に地元地域や住民からの協力を得るためには、当然のことながら、応援スポット運営における負担感を軽減し、満足感を創出するという、両者のバランスを適切にマネジメントしていくことが重要である。また、そのマネジメントにおいては、大会組織委員会事務局（金沢市行政）による大会運営全体の制度的な設計の見直しによって達成されるべきものと、各地域内での蓄積ノウハウの可視化や共有化に向けた情報交

換などを含めた地元地域側の主体的な取組みによって達成されるべきものと両者が求められる。

具体的な改善に向けて検討すべきポイントとして、以下の5点をあげておきたい。

①コース設定の見直し

コースが通過する地域や町会数を増やすことで、金沢マラソンの「自分事化」を推し進めるべく、数年ごとにコースをマイナーチェンジするなどの工夫が期待される。また、大胆な発想としては、スタート地点とゴール地点を入れ替えることで、各応援スポット運営にかかる拘束時間の固定化の解消を図るといったアイディアも聞き取りから得ることができた。

②応援スポット設置地点についての地元意見の反映

地元町会内をコースが通るにもかかわらず、大会事務局から割り当てられた担当応援スポットが町会外に設置されているといったミスマッチが起きている。過去には、複数の町会連合会が合同で運営する応援スポットを分割し、対象エリア内に複数スポットを配置した事例も確認された。柔軟な対応を認め、地元で応援できることで各地域のより主体的な取組みの発生が可能となる環境設定をめざすべきであろう。

③コース外町会からのランナー参加枠の設置

地元町会内をコースが通らないことで、金沢マラソン開催が「他人事化」してしまい、応援スポットの運営協力に対して大きな負担感を抱えている町会もある。その中でも、地元町会からの参加ランナーがあることで、横断幕など応援グッズを自主的に持ち込むなど、創意工夫を凝らして楽しみを見出している事例を聞くが、抽選倍率の上昇により、地元ランナーにとっても「走りたくても走れない」大会となりつつある。コース外に位置する町会からのランナー参加枠を設けることができないだろうか。

④スポット運営リーダーを支える仕組みづくり

応援スポットの出演団体に対しては謝礼金が支払われるが（調査対象スポットでは1ヵ所のみ謝礼金なし）、スポット運営スタッフに対しては謝礼金はない。しかしながら応援スポット運営を全体統括し、関係者間のコーディネートを担う運営の中核リーダーにおいては、かかる負荷量に対しての対価付与やサポートは不十分であるどころか皆無に等しい。「会長である」、「役員である」、「公民館職員である」といった立場や役職に紐づいていることも多い。こうした運営リーダーの意欲や情熱に依存するだけでなく、リーダーを支える仕組みやリーダーの交代を見据えた体制づくりが必要となる。

⑤応援スポット間の蓄積ノウハウ共有のための意見交換

聞き取り調査実施時に、各応援スポット実行委員会で作成、配付される資料の収集を実施したところ、きめ細か

いマニュアル等が作成されていた。過去5大会の実績を経て、各実行委員会内では様々な運営ノウハウが蓄積され、その担い手が育成されてきている。一方で、大会当日は自らが運営する応援スポットから離れて他のスポットの視察を行うほどの余裕はないため、他の応援スポットの運営の工夫について参照することはなされていない。互いが蓄積してきたノウハウを共有し、相互に発展するための意見交換の場があれば良いと考える。また、応援スポット運営関係者のみならず、ランナー、一般ボランティアなど多様な立場で金沢マラソンに関わるステイクホルダー間での相互交流があれば、さらに有益な発見や気づきを生み出す場となるであろう。

以上のような取組みを検討する上で、特にコース設定の見直しなど、各種の交通規制、公共交通機関の特別運行、それに伴う市民生活への影響、国際陸上競技連盟や日本陸上競技連盟からの公認コース認定の再審査など、容易に実施できないものもある。また、地元ニーズがあるからといって、応援スポットの設置カ所数を増やし続けていけば、各応援スポットに対して支払われる金沢市からの委託金配分額をどうするかといった課題が新たに浮上する。大会組織委員会事務局（行政）側は、このような各応援スポットおよび各地域からの声に丁寧に耳を傾け、十分な対話を通じて真摯に対応していくことが、両者の信頼関係の構築や強化へとつながり、大会の持続可能性を高めることに貢献するだろう。

行政側の対応だけでなく、ボランティアに大会を支える地元地域や住民側の主体的な動きを促すことも必要である。浦久保（2017）は、スポーツイベントにおけるボランティアマネジメントのポイントとして、ボランティアが行うべき事項を「活動」、主催者や有償スタッフが行うべき事項を「業務」と定義し、ボランティアの役割範囲を明確にし、「活動」の充実を図るとともに、「活動」と「業務」とを混同せず、ボランティア側の「労働感」を想起させないような工夫や場づくりが重要であるとしている。また、スポーツイベントを支える人達に対する最大の対価は「情熱」と「経験価値」であり、それらの人の意欲や動機に伝える、自己実現、自己成長、つながりといった「非地位財」の高度なマネジメントが求められると指摘する。このようなマネジメントを実行できる専門家の存在と多くの人を巻き込むエンゲージメント（きずなづくり）が重要であると述べている。

今後の応援スポットの持続可能な運営についての検討を進めるためには、それぞれの応援スポット運営における課題を個別に捉え、そのマイナーチェンジによって改善を図るといった狭い視点からだけでなく、金沢マラソンを今後どのような大会としていくかという将来ビジョンに照ら

し合わせた運営モデルの再設計と、それにもとづく具体的な施策の実行という広い視点に立った改善が求められる。またそれを担う専門人材も必要となるだろう。

前述のとおり、大会組織委員会は今後めざすべき大会像として、「参加ランナーに選ばれる大会」、「多くの関係者で支える大会」、「県民・市民に愛される大会」というビジョンを既に打ち出している。各種のアンケート結果を見る限り等では、参加ランナーや一般ボランティアからは高い満足度が得られている⁽²⁾。一方で大会人気を支える応援スポットの運営関係者をはじめとした地元町会連合会や公民館組織からは、大会事務局である行政からの要請による動員という様相が依然として垣間みられ、その体制からの脱却を図ることが今後の持続可能な大会運営におけるキーポイントとなる。図1に示したような運営モデルの構築をめざす作業は、金沢マラソンの効率的、効果的な開催という範囲に限定されたものではなく、金沢市における行政、地域（町会）、市民、企業、学校といった関係機関の連携、協働によるまちづくりのシンボルとしての金沢マラソンの新たな存在価値を創出していくためのプロセスであるといっても過言ではないであろう。

4 おわりに

本研究では「支えるスポーツ」の視点から持続可能なスポーツイベントのあり方について、金沢マラソンを事例として、筆者らがこれまで継続してきた調査研究に加えて、金沢マラソン2019の応援スポット運営関係者に対する聞き取り調査の結果をふまえた考察を行い、さらなる知見の蓄積に取組んだ。

その結果、応援スポット間に様々な格差が存在し、それが応援スポット運営における負担感を生み出す原因となっていることが明らかになった。一方で、各応援スポット運営関係者の創意工夫による運営改善の経緯や運営ノウハウの蓄積、ノウハウを有する人材の育成がなされてきたこともわかってきた。格差の解消に向けては、大会組織委員会と各応援スポット実行委員会との間での十分な対話によって、個別課題に対する改善作業を推し進めると同時に、大会組織委員会が示すめざすべき大会像にある、「多くの関係者で支える大会」から一歩踏み込んで「多くの関係者が“協働して”支える大会」をめざした大会マネジメントの見直しが必要であることが示唆された。

第6大会となる金沢マラソン2020は、2020年10月25日（日）の開催にむけて準備が進められたが、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、同年5月11日（月）に開催中止が発表された。その後、金沢マラソンのオンライン開催⁽³⁾が発表され、コロナ禍においても、これまでに築き上げてきた大会人気を維持すべく、ランナーとのつながりを

途絶えさせないための取り組みがなされている。

では、2020年の大会中止は「支える存在」である地元地域住民や応援スポット運営関係者と金沢マラソンとのつな

がりに対してどのような影響を与え、2021年大会ではその影響がどう顕在化するであろうか。引き続きその動向に注目していきたい。

注

- (1) 筆者らは金沢マラソンの開催による社会的効果（地域住民の連帯感の醸成、地元住民の地域に対する帰属意識の高揚、ボランティア人材の育成など）について、継続的な調査研究を実施してきた。

2015年の第1回大会では、①マラソン開催による交通規制に伴う沿道への影響調査、②金沢マラソンボランティア学生の意識調査、③金沢市内小学生に対する意識調査の3つの調査を実施した（西村・池田、2016a;西村・池田、2016b）。

2016年の第2回大会では、沿道への影響について地域関係者へのヒアリング調査を実施した（西村・池田、2017）。

2017年の第3回大会では、①沿道応援スポット運営関係者へのアンケート調査、②学生ボランティアへのアンケート調査、沿道関係者へのヒアリング調査、④先進事例（いぶすき菜の花マラソン：鹿児島県指宿市）についての現地フィールドワーク及び関係者へのヒアリング調査を実施した（西村・池田2018a;西村・池田2018b）。

2018年の第4回大会では、沿道応援スポット運営関係者へのアンケート調査を実施した（西村・池田、2019;西村・池田、2020）。

- (2) 金沢マラソン2019の参加ランナーに対して大会組織委員会が実施したwebアンケート調査では、「参加して満足したか」という問いに「とても満足した」、「満足した」と回答したランナーが98.1%（N=3,546人）、「2年以内に再び参加したいか」という問いに「とてもそう思う」、「そう思う」と回答したランナーが96.3%（N=3,546）に及んでいた。

また、一般ボランティアを対象としたアンケート調査では、ボランティア参加の満足度について「強く感じた」、「感じた」と回答したボランティアが90.3%（N=3,224人）であった（佐川、2020）。

- (3) 大会名は「KANAZAWA MARATHON2020 ON-LINE」とされ、開催期間は10月中旬～11月中旬、独自のスマートフォンアプリを使い、どこからでも参加することができる。参加定員は5,000人、参加料は1,500円となっており、完走者の中から抽選で金沢マラソン2021の出場権が贈呈され、参加者には記念品が贈呈される（金沢マラソン2020, online）。

参考文献

一般社団法人日本スポーツツーリズム推進機構編（2015）『スポーツツーリズム・ハンドブック』学芸出版社。

金沢マラソン2019ウェブサイト

<https://www.kanazawa-marathon.jp/2019/>（2020年7月11日取得）

金沢マラソン2020ウェブサイト

<https://www.kanazawa-marathon.jp/>（2020年7月11日取得）

観光庁（2011）スポーツツーリズム推進基本方針

https://www.mlit.go.jp/kankocho/topics05_000034.html（2020年7月11日取得）

北村尚浩・野川春夫・柳敏晴・川西正志・萩裕美子・前田博子（1997）スポーツイベントによる地域活性化への効果：開催地住民の評価に着目して。鹿屋体育大学学術研究紀要。17, pp.47-55.

西村貴之・池田幸應（2016a）金沢マラソン2015の効果測定にむけた実践型調査研究プロジェクト実施報告書、金沢マラソン検証研究グループ。（平成27年度「学都金沢」地域づくり活動支援事業）

西村貴之・池田幸應（2016b）金沢マラソン2015の社会的効果に関する研究：地域スポーツを支える担い手育成の視点から。日本地域政策学会第15回【大阪】大会予稿集, pp.36-37.

西村貴之・池田幸應（2017）「金沢マラソン2016」の開催による沿道への影響について：地域関係者へのヒアリングをもとに調査報告書、金沢マラソン検証研究グループ。

西村貴之・池田幸應（2018a）金沢マラソンの実施効果に関する研究 調査研究報告書、金沢マラソン検証研究グループ。（金沢星稜大学総合研究所 平成29年度共同研究活動補助事業）

西村貴之・池田幸應（2018b）金沢マラソンの実施効果に関する研究：「スポーツを通じた協働のまちづくり」にむけた一考察。日本地域政策学会第17回全国研究【岡山】大会予稿集, pp.110-111.

西村貴之・池田幸應（2019）金沢マラソンの実施効果に関する研究Ⅱ 調査研究報告書、金沢マラソン検証研究グループ。（金沢星稜大学総合研究所 平成30年度共同研究活動補助事業）

西村貴之・池田幸應（2020）支えるスポーツからみる地域活性化：金沢マラソンの沿道応援スポット運営関係者への調査から。日本地域政策研究, 24, pp.14-21.

RUNETウェブサイト

<https://runnet.jp/>（2020年7月11日取得）

佐川哲也（2020）金沢マラソン2019ボランティア個人調査報告書、金沢大学スポーツ社会学研究室。

スポーツ庁「スポーツ基本計画」（第2期計画）

https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop01/list/1372413.htm（2020年7月11日取得）

浦久保和哉（2017）スポーツボランティアの過去と現在。現代スポーツ評論37：スポーツとボランティア, pp.91-100, 創文企画。